

2021年10月3日 説教「わたしはぶどうの木」

ヨハネの福音書 15章 1～5節

今朝はヨハネ 15章から学んでいきましょう。

1. ぶどうの木と農夫 (1～3節)

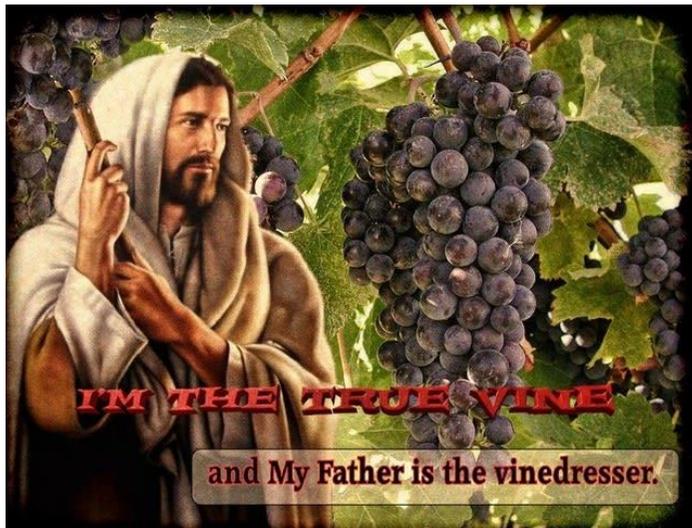
①父は農夫 (1) 「わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。」 イエス・キリストは、周りの自然や生活をよくたとえに用いられました。ぶどうの木はパレスチナではよく見られる果樹でした。そこで、ご自身をぶどうの木にたとえておられるのです。朝晩の寒暖差があるパレスチナにおいて質の良いぶどうの実がなるそうです。ここで「まことのぶどうの木」とあるのは、「本当の意味での」といった意味です。その理由はこの話の中に答えが出ています。そして、父なる神を農夫にたとえられています。それは、世に遣わされたイエス・キリストの働きがぶどうの木として、実を实らせる事にあるとするなら、父なる神は実りを管理するのは農夫であり、農園を管理してくださる方という意味合いなのです。

②刈り込み (2) 「わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなさいます。」 幹があれば枝があります。枝には葉がつき、やがて実がなります。しかし、実を結ばない枝もあるわけです。そうすると、農夫はその木の枝を取り除きます。また、実を結ぶ枝にしても、さらに実を結ばせるために、上手に刈り込みをします。実を結ばせるために、農夫にはいろいろな働きがありますが、刈り込みも重要な一つなのです。

③もうきよい (3) 「あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことによって、もうきよいのです。」 これを聞いているキリストの弟子達に主は、「話したことばによって、もうきよい」と言われています。「きよい」というのは聖め分かたれているという意味で、聖なる神の御手のなかにあるということです。馬耳東風であればだめですよと言われるなら、わかりやすいですが、ここでは、「話したことばによってもうきよい」とあるのです。この言葉は、救いが恵みであることを示すとともに、キリストのみ言葉を心の深いところで受け止めるべきことを、勧めておられるとも理解できます。

2. 枝と木の関係 (4節)

①主にとどまる (4) 「わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります」 イエス・キリストにとどまるとは、どのようなことでしょうか。枝が木につながっていれば、幹を経て、水分や養分を得ることができます。とどまっているというのは、キリストからの霊的水分や養分をいただくことです。具体的に言えば、キリストによりすがって生きることを告白することです。また、あなたに罪の意識が



生じるならば、悔い改めの祈りをする事です。また、キリストの御言葉をいただくことを求める心をいただくことです。その時に主イエス・キリストも働いてくださるのです。また聖霊も働いてくださるのです。

②枝だけでは (4)「**枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことはできません。**」一方、もし枝が幹につながっていなければどうなりますか。当然のことながら、枝は木から離れてしまえば、水分も養分も得られませんから、実を結びませんし、そのままなら枯れてしまいます。

③とどまらないなら (4)「**同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。**」それと同じように、私たちもキリストにつながっていなければ、実を結ぶことはできないのです。つながっていなければ、霊的呼吸もできません。霊的水や霊的養分を得ることができず、結果として霊的に結実をしないのです。ガラテヤ書の5章には「御霊によって歩みなさい」とあり、そうするならば御霊の実として「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」が与えられるとあります。逆にキリストから離れ、肉によって歩むならば、「偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、醜悪、遊興」といったものをうちにもたらすことになると思います。

3. 多くの実を結ぶために (5 節)

①ぶどうの木と枝 (5)「**わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。**」1 節から 4 節までに述べられてきた、たとえ話がまとめられます。つまり、イエス・キリストはぶどうの木であること、そしてそれを聞いている人々は枝であることが明言されます。《エゴージェイミ ホームペロス》(わたしはぶどうの木です)。ここでキリストは、弟子達の関係がぶどうの木の根幹と枝の関係であることが改めて伝えられたのです。

②多くの実を (5)「**人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。**」そして、その結果についても、まとめられます。人がキリストにとどまってい、なおかつキリストもその人にとどまってくくださる関係にあるならば、その人は霊的果実を実らせるということです。マタイの福音書 13 章にはイエス・キリストの「四つの地に蒔かれ種」の話があります。道端、土の薄い岩地、いばらの地、そして良い地。良い地に蒔かれた種は百倍、六十倍、三十倍の実を結んだとあります。良い地とは「みことばを聞いてそれを悟る人」とありますが、まさにキリストにしっかりとつながっている人のことです。

③何もできない (5)「**わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。**」キリストから離れていても何も問題がない、と

いう人がいるかもしれません。キリストなしでも、何でもできるという人もいるでしょう。実際、そういう時代がありました。合理主義が台頭し、人間中心主義がはびこってくると、神に対する不信仰がやってきたのです。神学の分野にも、自由主義が横行し、神を人間の自由のままに操り、聖書に対する絶対的な信頼をも揺るがし、ずたずたにするような事態も起きたのです。それらはキリストに対する不信でもありました。「キリストを離れては、あなたがたは何もすることができないからです」という御言葉をもう一度確かめたいものです。

《結論》

姉ヶ崎キリスト教会の教会誌の名前は「ぶどうの樹」です。第一号は、1989 年に発行されたのですが、この会堂の前のプレハブ会堂が建てられ

て間もない頃でした。礼拝する場所がなかなか見つかりませんでした。全国
の土地の価格が高騰している時期でした。桜台の中の空き地の所有者に順

番に連絡して、土地を貸してくださる方を求めたのです。なかなか、貸してくださる方はありませんでした。しかし、主の憐みで貸して下さる方が与えられ、そこに 16.5 坪のプレハブ会堂を建てさせていただき、教会の歩みは続けられたのです。そのときに導かれていた大切な御言葉がヨハネ 15 章でした。そこで、教会誌名は「ぶどうの樹」となったのです。

もう一つ、私は神学校を卒業して、山梨県に派遣されました。右も左もわからない者が、甲府北の地での開拓伝道に入ったのです。その地には、ぶどう棚がたくさんありました。勝沼に行けば、一面のぶどう畑でした。農夫の方々は朝早くから働いておられました。実がつけば、一つ一つの房に袋がかぶせられなど、丹念な育みがなされていきました。そんな時に、よくヨハネの福音書 15 章のことを思い出したものでした。

さて、エゴージェイミ (わたしは～です) とイエス・キリストが言われた部分をヨハネの福音書から見て来ましたが、この学びシリーズ最後のエゴージェイミです。これまでのエゴージェイミと異なるところは、「わたしは～である」と言われた後に、「あなたがたは～です」といって、弟子達あるいは人との関係を述べられていることです。確かに「わたしは良い牧者です」(10 章)と言われた時に、羊との関係が伸べられますが、「あなたがたは羊です」とは言われていないのです。今朝の聖書箇所では、明確に「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です」と言われているのです。ここに主と私たちの関係性というものを見るのです。それではどのような関係なのでしょう。その関係は

つまり、枝である私たちが、ぶどうの木であるイエス・キリストにつながっていてこそ生きる存在であるということです。キリストにつながっていないければ、霊的な命を保つことができない者たちだということです。

個の確立だとか主体性だとか言われます。それはそれで良いです。しかし、聖書では人間は創造主なる神によって造られた存在であり、主なる神と間にこだわりのない平和な関係があればこそ、生きていける存在であることが教えられています。主との関係があれば、個は確立するのです。主とつながってこそ、人の意見などに左右されず、主体的に生きることができるのです。

このことを少し、言い方を変えるなら、枝である私たちには、「心の貧しさ」が必要であるということです。「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから」(マタイ 5:3) とあります。「心の貧しい」というというのは、謙遜な心のことです。神の前にへりくだった心こそが大切なのです。主なる神につながってこそ、私たち人間は生きることができるのだと覚えましょう。「キリストはぶどうの木、私たちは枝」なのです。しっかりとキリストにつながって生きていこうではありませんか。